

『赤枝尚樹, and 森川和則. "人はなぜ賭けるのか: 不確実性から得られる満足感・期待感に関する心理学的・社会学的研究の動向と展望." 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 36 (2010): 19-37.』

1. はじめに

人はしばしば不確実性に賭ける経済行動をとる。伝統的な経済学は「人間は自己の利益を最大化するように合理的に行動する」ことを大前提としてきたが、現実の人間は不確実性のもとでしばしばこの前提に合わない「非合理的」行動をする。これを経済学では、アノマリー (anomaly) と呼ぶ。そしてこれまで、アノマリー行動がなぜ起こるのかという問いに答えることを目的に、経済学、心理学、社会学などといった様々な分野によって、様々な観点から分析がおこなわれてきた。その中でも近年は特に、心理学者である Kahneman と Tversky らの研究をきっかけにして、経済活動における心理学的研究が盛んになっている。Kahneman らはプロスペクト理論 (prospect theory) と呼ばれる理論を提唱した。筆者らはこれについて「彼らの指摘で特に重要なのは、アノマリーと呼ばれる行動を説明する観点として、価値の重み付けと、確率判断の二つの側面からの議論が存在することを指摘し、それらを修正・統合したことであろう。」と述べている。そしてその後は彼らの研究の影響を受け、行動経済学や経済心理学に影響を与えている。

この論文は、経済心理学と社会学の観点からの「賭け」研究に焦点をしばり、それらの研究がそれぞれどのようなアプローチを用いているかを述べている。具体的な構成としては、まずは第二節で Kahneman と Tversky らの研究を基礎として発展してきた研究として投資研究を、さらに第三節ではギャンブルに関する研究を、確率判断に関する研究を軸に概観している。そして第四節ではそれらの研究とは異なるアプローチをみせている社会学におけるギャンブル研究を概観する。そして最後の第五節において今後の展望に関して述べてある。

2. 確率判断研究の応用 (1) - 投資研究 -

これまで長いあいだ、不確実性やリスクのもとでの経済行動に関しては、一定の効用関数 (utility function) にもとづく期待効用理論 (expected utility theory) での説明が妥当であるとされてきた。期待効用理論においては、結果が不確定な状況下において、人々は効用を客観的な確率で加重平均した期待効用を最大化するように選択するとされている。しかしながら、期待値がマイナスであると予想されても実際には多くの人が参加するのが現状だ。

そのような事実を説明しようと、Kahneman と Tversky を中心に多くの研究がなされてきた。彼らは、個人の選好に関する側面と、個人の確率判断に関する側面の二つに大きく分けて研究してきた。そのなかでも特に後者の側面は、確率認知アノマリーや認知的誤謬と呼ばれている議論につながるものである。次にその個人の確率判断に関する研究について述べる。

[2.1 自信過剰]

自信過剰とは、自分の決断に無根拠な自信をもつことであり、このことが人を投資などの積極的な行動に駆り立てるとされている。Camerer と Lovallo (1999) は、自信過剰が市場への過剰な参加を促すことを指摘した。さらに、Allen and Evans (2005) は競売市場の分析から、自信過剰は投資の結果によっては減少しないことを指摘した。

[2.2. ギャンブラーの誤謬と熱い手の誤謬]

近年、人々の認知に対するヒューリスティクスの影響が示唆されている。ヒューリスティクスは「近道選び」ともいわれ、複雑な情報に対して素早くおおまかな認知的処理をすることである (楠見 2007)。

そのようなヒューリスティクスの議論としては、「ギャンブラーの誤謬 (gambler's fallacy)」が有名である。それは、同じトレンドが長く続くはずはないから、そろそろ自律的修正が生じるはずだ」という予想することである。これは、「ランダムな現象において、極めて多数の試行結果 (例えば表が出る確率は50%) と同様の傾向が少数のサンプルにも表れるはずだ」という間違った考えであり、「代表性バイアス」のひとつである。株式の場面で、短期間の上昇トレンドの結果から、その後の下降トレンドを予想することなどがこれに当たる。

また、ギャンブラーの誤謬に似ているが逆方向の予想をもたらすバイアスとしては「熱い手の誤謬 (hot hand fallacy)」というものがある。これは、偶然によって成功が連続した際に「波に乗っている (hot hand)」という錯覚を起こし、更なる成功の継続を予感するものである (Burns and Corpus 2004)。

3. 確率判断研究の応用 (2) - ギャンブル -

ギャンブルにおける確率認知を検討するにあたって、Ladouceur and Walker (1996) は、ギャンブルに関する認知を二つのタイプに分類した。それらは、「制御幻想」と「Luck/Perseverance」に関するものである。本節では、実際は制御できない現象を制御可能な現象であると錯覚する「制御幻想」というバイアスと、「主観的な運の認知」によるバイアスに焦点をあて、概観している。

[3.1 制御幻想]

私たちは、実際にはランダムに決定されていることを、自分の技術や努力の賜物であると錯覚していることがよくある。特定の場所で買うと当たりやすいいということや、特定の番号が当たりやすいいといったことはよく言われており、そのような情報を活用しようとする人々の行動に影響を与えていると言われている。このように、実際には制御不可能であるものを、自分が制御できると思い込んでしまい、成功確率を高く錯覚して行動してしまうことを「制御幻想」と呼ぶ (増田ほか 2002) さらに、Langer は制御幻想を「個人的な成功確率を、客観的な確率よりも不適當に高く見積もること」 (Langer 1975: 313) であるとし、実際には自分が左右できないことを、技術

などで制御できると思ひこむことなどを含めた概念として定式化した。このような認識上の誤謬が、人々にとってギャンブルをさらに魅力的なものとしているとされ (Hill and Williamson 1998)、人々をさらにギャンブルに誘うと考えられている。

[3.2. 主観的な運に関する研究]

また、自分を強運の持ち主であると認識することで、客観的な確率よりも、自分が賭けで勝つ確率を大きく認識するというバイアスも指摘されている。これについて筆者らは「主観的な運に関する側面といえるだろう。」と述べている。

運に関する認知が、賭けへの参加に与える影響については、Rogers and Webley (2001) において示されている。Rogers と Webley は、年齢や教育、収入などを統制しても、運に関する認知が、人々をギャンブルに誘う効果があることを実証した。このような研究としては、天性の運に関する研究である、Steenbergh et al. (2002) や Wohl et al. (2007) なども挙げられる。特に Wohl らは大学生の調査によって、自分に天性の運があるという認識が、ギャンブルに対する意識に大きな影響を与えていることを指摘した。

[3.4 その他の要因]

また、その他にも主観的認知バイアスに関連する研究は蓄積されている。宝くじ研究を通してギャンブルに関する認知理論を概観した Rogers (1998) は、制御幻想や個人的な運に関する信念のほかに、ギャンブラーの誤謬やオッズの誤った理解なども挙げている。さらに、ギャンブルに関する認知的誤謬の分類について議論をおこなった Toneatto (1999) も、制御幻想と運に関する信念のほか、確証バイアスや錯誤相関 (illusory correlation) などの影響も指摘した。

4. 社会学におけるギャンブル研究

Lutter (2007) によれば、ギャンブル参加の需要に関する研究には、五つの理論的アプローチの潮流が挙げられるという。それらは、(1)勝利に関する確率判断をおこなう際の認知的バイアスの役割に焦点を当てる潮流、(2)合理的な投資判断としての需要を再構成することを志す経済理論の潮流、(3)ギャンブル参加を剥奪に帰する、緊張処理の社会学理論の潮流、(4)ギャンブルへの需要が社会的埋め込み (embeddedness) に影響を受けていることを強調する、ネットワーク分析の潮流、(5)高い地位への幻想が商品に対する需要を形成し、人々を市場に没頭させるとする消費の社会学理論の潮流、であるという。それらのうち、(3)、(4)、(5)は社会学における研究であると筆者らは述べている。

[4.1 社会階層と関連を指摘した研究]

社会学のギャンブル研究としての第一の潮流としては、社会階層との関連を指摘した研究が挙げられる。このような議論の嚆矢は Devereux ([1949]1980) や Bloch (1951) であり、この研究では、特に下層の人々がギャンブルに参加しやすいとされてき (Lutter 2007)。

この解釈としては、二つのものが考えられるという。そのうちの一つは、緊張処理の考え方である。この考え方によれば、「ギャンブルは日常や近代的産業生活の退屈さからの逃避」(Bloch 1951: 217)であるとされ、階層ごとの文化や日常の単調さなどがギャンブル参加に影響しており、さらには現在の社会的地位の逆転を狙って、機会の平等なギャンブルに参加するという。

また、もう一つの解釈は消費の社会学理論によるものである。消費の社会学理論によれば、人々がギャンブルに参加する理由は、より高価な商品への幻想のためである。消費の社会学理論の文脈において、商品の購入は、より高い物質的生活を可能にし、そのことが自己アイデンティティに影響しているとされている(Campbell 1987)。下層の人々は高価な商品への直接的なアクセスの機会から排除されているために、ギャンブルに一縷の望みを抱き、参加するのである。

近年、Beckert and Lutter (2007) は、宝くじ参加や賭け金の額などへの、社会階層や宗教的な信念、主観的な確率認知の影響について議論をおこなっている。その結果、下層の人々や迷信を信じやすい人がより参加しやすいことなどを明らかにしている。

[4.2 ネットワーク分析の潮流におけるギャンブル研究]

社会学におけるギャンブル研究の第二の潮流として、ネットワーク分析の流れが挙げられる。

Light (1977) はスラムにおけるギャンブルを研究し、ギャンブルに参加することによって信頼や共同体の精神、人種に関するプライドなどが形成されていく過程を記述している。また、その流れを受けたAdams (1996, 2001) は、社交などのフォーマルな場でのネットワークに注目し、ギャンブルが社交として機能しており、人々がネットワークを維持するためにギャンブルに参加することを指摘した。

さらには、計量的な手法を用いた分析として、先述したBeckert and Lutter (2007) があり、計量的な分析によっても、人々が持つネットワークが宝くじ参加に影響を与えることが示されている。また、孤独なギャンブル行動の規定要因を検討したBernhard et al.

(2007) は、スロットやビデオポーカーマシン以外のギャンブルをおこなうことや、高齢者であることが、ギャンブルの孤独化を促進する効果を持つことを明らかにしている。

このように、ネットワークの観点からの研究は、人々のギャンブル行動の動機として、人間関係という要因を強調していることに特徴があるといえるだろう。

5. 今後の展開について

ここでは筆者は「不確実性の下での行動に関する研究の展開」について大きく分けて6つの展望や期待があると述べている。

第一に、確率認知に関する研究をさらに進め、錯誤相関の議論と結びつけることであ

る。錯誤相関のインプリケーションをギャンブルや投資に応用することによって、より発展的な研究が可能になるのではないだろうか。と述べている。

第二に、ギャンブラーの誤謬と熱い手の誤謬が起こる条件の違いについての研究を進めることである。先に述べてあったように、ギャンブラーの誤謬と熱い手の誤謬は、逆方向の予想をもたらすバイアスである。そのため、この二つの誤謬が起こる条件をそれぞれ明らかにしていくことで、状況によって人々の行動が変化することについての説明が可能となってくるのである。と筆者は述べている

第三に、社会学の概念である「予言の自己成就 (self-fulfilling prophecy)」(Merton1957) との結びつきだ。予言の自己成就とは、みんなが同じ信念を持つことで、ある出来事が本当に実現してしまうことである。人々がどのような信念を持って行動しているかということが、集合的な帰結にどのような影響を与えているかを考察することが非常に重要となってくる。

第四に、社会的な階層や準拠集団などとの関連において、ギャンブルへの参加傾向をさらに検討することが挙げられる。これまでも、ギャンブルの参加傾向を個人の年齢や教育と結び付けた研究は行なわれているしが、経済活動とネットワーク論とを結びつけ、満足感に与える影響を検討したDiMaggio and Louch (1998) などの議論と関連して、大規模データを使用した分析をさらにおこなうことが考えられよう。

第五に、主観的な確率認知のメカニズムに関する研究と、社会階層やネットワークの研究をつなげることも必要であろう。その理由として筆者らは必ずしも独立する要因ではなく、交互的に影響しているかもしれないからだと述べた。

第六には、ギャンブル行動と投資行動を結びつけることも一理ある。特に、運の研究を投資と結びつけることが、興味深い研究を生み出すだろう。日本でも幸運感情と不運感情の持続感について検討した村上 (2002) など、主観的な運の認知メカニズムに関する研究は蓄積されてきており、そのような観点からの検討も考えられるのである。